

群 教 セ	E03 - 03
	平 17. 227 集

友達の気持ちや願いを考えて行動できる 児童を育てる学級活動の工夫

— 友達のアドバイスを生かす「みんなでつくる係活動」を通して —

特別研修員 河原 賢志 (伊勢崎市立南小学校)

《研究の概要》

本研究は、「みんなでつくる係活動」を通して、友達の気持ちや願いを考えて行動できる児童の育成を目指した研究である。係活動の取組について、①具体的なお願いやアドバイスを贈り合い(係活動を見直す場面)、②お願いやアドバイスにそって改善を加えた係活動を実践し(係活動を実践する場面)、③改善した係活動を認め合う(係活動を振り返る場面) 3場面を1サイクルとし、習慣化を目指し繰り返し活動を行った。

キーワード 【小学校 特別活動 学級活動 係活動】

I 主題設定の理由

現代の日本は核家族化が進み、子どもの数も減少の一途をたどっている。子どもたちは家族の中で数少ない子どもとして大切に手をかけて育てられている。その点では、自分の願いをかなえられやすい家庭環境にあると言える。その一方で昨今、家庭では教育力が低下し、子どもに必要なしつけが十分にできない傾向も強まっている。自分の願いが満たされる一方で自分以外の人の立場や気持ちを考えたり、共感的に力を合わせて仕事をしたりする場面が少なくなることは、社会的な信頼関係を結びにくくする要因ともなる。

本学級(5年 男子 17名 女子 19名 計 36名)の児童は、「友達同士が思いやりをもち」「協力する学級」を学級目標として掲げている。しかし、実際には友達の行動に対して共感的でなく、協力的な活動が十分にできない傾向がある。ともに力を合わせて活動したり、認め合ったりする喜びをもつまでには至っておらず、信頼関係が十分築かれているとは言いがたい。同時に、自分自身の言動にも自信をもつことができず、精一杯自己表現することができない傾向も認められる。

これらのことは、頭では理解できていても行動にうまくつなげることができず、社会生活のスキルや感情のコントロールなどの社会性が十分育っていないことに起因する部分が多いと考えられる。社会性の育成は、学習指導要領第4章特別活動の目標に「集団の一員としての自覚」を高めることや「協力してよりよい生活を築く」こととして掲

げられている。また、「社会性を身に付けるためには、児童が互いの特性を認め合う中で、与えられた役割を自覚し、責任をもって仕事を果たす必要があり、そのような経験を積み重ねることが大切である。」とある。

そこで本研究では、人間関係の改善を第一義に置きながらも、社会性のスキルアップを目指す場として係活動を取り上げた。そして係活動において友達から寄せられたお願いやアドバイスに耳を傾けながら、仕事の仕方を改善していく実践を行い、「みんなでつくる係活動」と名付けた。とかく係からほかの児童への一方通行で終わりがちな係活動に、係へのお願いやアドバイスを加えて双方向の意味をもたせている。児童は常に友達の意見に耳を傾け、友達の気持ちや願いを意識した活動をすることにより、視野を自分中心から友達の立場へ、さらには学級全体へと広げることができるとともに、互いに社会性を身に付け、習慣化させ、信頼関係を築いていく効果的な活動になると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

学級活動において、「みんなでつくる係活動」を通して、係活動に対する友達からのお願いやアドバイスをもとに、仕事の仕方に改善を加えて提示する、双方向からの高まりのある活動を展開し、習慣化させることにより、友達の気持ちや願いを考えて行動できる児童が育つことを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 係活動を見直す場面において、係の仕事ぶりについてお願いやアドバイスを寄せる活動を行うことにより、児童は自分の係に期待されている役割を意識したり、学級をよくする視点をもって係活動を考えたりすることができるようになるであろう。
- 2 係活動を実践する場面において、友達のお願いやアドバイスを取り入れた新しい仕事を実践し、日々の振り返りを行うことにより、児童は自分たちの仕事が友達のためになっているかどうかを意識しながら生活したり、自分たちのアドバイスが係の仕事に生かされている喜びを感じたりすることができるであろう。
- 3 係活動を振り返る場面において、係の仕事に対する感謝の気持ちを言葉で贈り合うことにより、係児童は友達の気持ちや願いを考えて活動する良さや、友達の活動をしっかりと見つけ、温かく認め合うことの大切さに気付くであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「友達の気持ちや願いを考えて行動できる児童」とは

係活動は「自分たちの力で学級生活を豊かにすること」が目的であると理解し、自分の気持ちだけでなく、友達の考え方に耳を傾け、学級のためになる工夫した仕事を考えたり、実践したりすることができる児童である。また、友達の活動をしっかりと見つけ、よい活動を的確に認めることができる児童である。

友達の気持ちや願いを考えた自分の行動が、友達の喜びへとつながり、それが自分の喜びに戻ってくるような、温かい人間関係を子供たちに実感させたい。

(2) 「みんなでつくる係活動」とは

以下に記すア～ウを1サイクルとして考え、繰り返し行っていく活動である。ア…係の仕事ぶりに対してお願いやアドバイスを青い付箋に書いて送り、係活動を見直す。イ…友達のお願いやアドバイスを参考にして改善を加えた新しい仕事を実

践する。ウ…新しい仕事についてよかった点や感謝の気持ちを黄色い付箋に書いて送り、認め合う。

(3) 「みんなでつくる係活動」を充実させるための掲示用紙の工夫

前述のア～ウの活動において使用した付箋や仕事の仕方などを掲示する用紙を工夫した。大きさはA3サイズで、ア～ウの活動について文字の記入や付箋の掲示が一枚の用紙上ですべて進められるようになっている。ア～ウの活動に対応して、以下に記す3つのスペースで構成した。

ア 「お願い&アドバイス」のスペースについて

児童が係の仕事に対してお願いやアドバイスを付箋に書いて贈る掲示スペースである。児童は自分たちの仕事ぶりに対して寄せられたお願いやアドバイスを読み、自分の係に期待されている仕事を知り、新しい仕事の仕方を工夫する際のヒントにしていく。新しい仕事についてはまず個人で考え、その後グループで話し合いをもつ。

付箋に書く際には、言葉遣いを気遣ったり、分かりやすい内容を心がけたりするように促し、活動がスムーズに進められるように助言する。付箋の書き方については、学級活動の時間を使って指導をするが、児童が慣れてきたら朝自習の時間なども活用し、常時活動へと移行する。

イ 「あたらしい仕事紹介」のスペースについて

友達の意見を参考にして新しく考えた仕事の仕方を記入するスペースである。このスペースには、係の新しい仕事のやり方を記す箇所と仕事への取組方を振り返り自己評価する箇所を設けた。

係ごとの話し合いで新しい仕事が決まったら、本スペースを示しながら仕事の内容を学級全体に報告し、理解してもらえようにする。

毎日係ごとに自己評価することにより、友達のことを意識して仕事する習慣をつけていく。新しい仕事は2週間続け、その間に寄せられたお願いやアドバイスをもとに、次の新しい仕事を工夫する。新しい仕事の仕方を用紙に書き換えたり、学級全体に紹介したりする活動は学級活動の時間に行う。

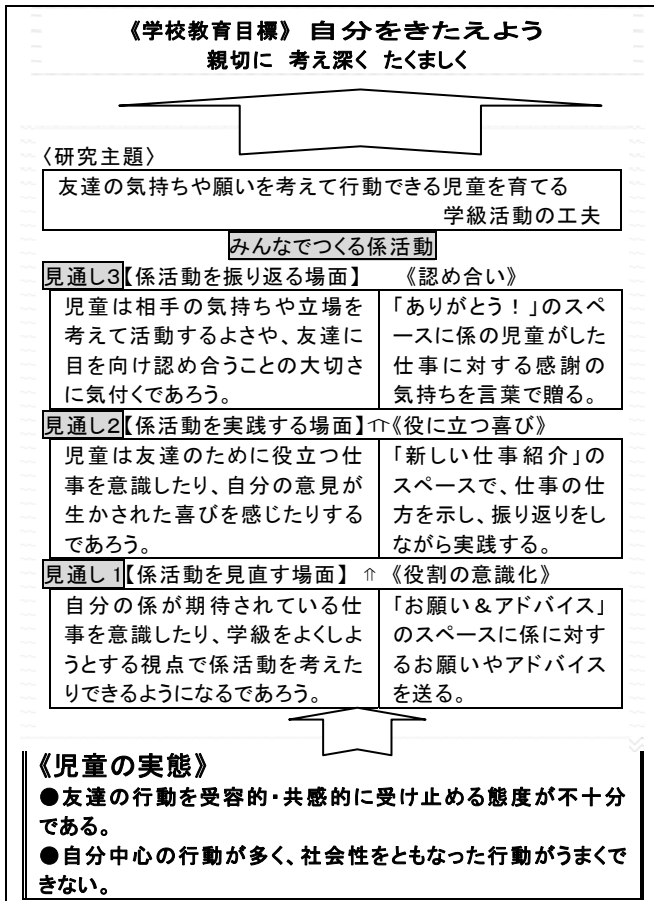
ウ 「ありがとう！」のスペースについて

各係が工夫して仕事をしたことに対し、よかった点や感謝の気持ちを書いた付箋を貼るスペースである。「〇〇係が工夫して仕事をしたことによって、学級のこんなところがよくなった」など、活

動の質に目を向けながら、具体的に記述できるように支援していく。

個々の作業に任せず、業前や一日の終わりなどに学級の全員で振り返りの時間を取っていく。

(4) 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

(1) 児童は自分の係に期待されている役割を意識したり、学級をよくする視点をもって係活動を考えたりできたか。(見通し1)

ア 実践の概要

2学期開始とともに係についての話合いをもった。まず本学級にとって必要な仕事内容をピックアップした。次に活動が充実するようにとの基本方針のもと、仕事内容が似た係はまとめた。話合いの結果以下のような12の係が決まり、2学期の係活動がスタートした。

- | |
|--|
| ①生き物係 ②お手伝い係 ③落とし物係 ④学習係
⑤黒板係 ⑥集配係 ⑦新聞係 ⑧体育係 ⑨手紙係 ⑩電気係 ⑪配膳台係 ⑫予定係 |
|--|

10月初旬に係活動を見直す場面をもった。児童は各係の仕事ぶりについて「お願い&アドバイス」という形で意見を付箋に書き、各係の掲示用紙に

貼りつけ、交換し合った。本活動は、学級活動の時間を利用して行った。

児童は貼られた付箋の内容に目を通すことにより自分の係がどのような仕事ぶりを求められているかを考えた。掲示用紙は教室後ろの掲示コーナーにすべて貼り、どの係の掲示用紙もいつでも見られるようにした。

その後、友達から寄せられたお願いやアドバイスの中から、自分の係にとって特に役立つと思われるものを個々にワークシートに書き出し、その理由もまとめた。今後新たに行ったほうがよいと思う仕事についても個人の考えをまとめ、後に係で話し合うときに活用した。

イ 結果と考察

児童は、お願いやアドバイスを贈る活動の仕方に慣れてくるにつれて、資料1のように係の現状を冷静に見つめ、学級のためになる意見を書こうとする姿も多く見られるようになってきた。はじめのうちは「何を書いたらいいのかわからない」という児童もいたが、早く書けた児童の意見を参考にしようと言言すると、要領を理解でき、その後は意欲的に付箋に書き込むことができた。

資料1 寄せられたお願いやアドバイス

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・20分休みとかに黒板消しをきれいにすると、3・4時間目も先生が黒板を消したとき、きれいに消えると思います。《黒板係に》 ・まだ習ってない字が新聞を見てあったので、<u>習っていない字はふりがなをふる</u>ともっとみんなが見やすくなると思います。《新聞係に》 |
|---|

一方、お願いやアドバイスを贈られる立場になると、友達からの意見を批判と受け取る児童も見受けられた。「何でこんなにがんばっているのに、こんなことを書かれなくちゃならないの?」とか「そんなの無理に決まってるじゃん。」といった発言もあった。その際は、お願いやアドバイスを生かした仕事ができれば友達が喜んでくれることや、その喜びの気持ちを「ありがとう!」の言葉に乗せて伝えてくれることを見通しとしてもたせ、継続して励ました。

落とし物係のA男も、最初のうちは「こんなに貼られた!」と何度も不満を口にしたが、他の児童と同様に継続して励ました結果、資料2のように「(落とし物を)みんながちゃんと見えていないと

思った。」など、自分の立場を友達の立場に置き換えて考えられるようになった。また資料3において「はっきりと、くわしくいう。」とあるように、友達の意見を生かして係の新しい仕事を考えていこうとする姿が見られるようになった。

資料2 参考になった「お願い&アドバイス」についての記述(A男)

あなたの係にとって特に役に立ちそうな意見	その意見のどんな所がいいと思いましたか。
落とし物係へちゃんとお願いしてくだせい。	ほくたちははきりしっていないとおもったからうんた。
みんなの戸外におとしものを置くとき来てくれるようにお願いしな。	みんながちゃんとおんていなしと思っから。

資料3 アドバイス後に新しく考えた仕事(A男)

はきりとくわしくいう。
まえにたおとしものをうし
3のロッカーの上におとしもの
のが④つた箱をおい
て見てもかう。

以上のことから、お願いやアドバイスを交換し合い、それらを参考にする活動を通して、児童が係活動について友達から期待されている役割を考えたり、学級をよくしようとする視点をもったりできたと考える。

(2) 児童は自分たちの仕事が友達のためになっているかどうかを意識しながら生活したり、自分のお願いやアドバイスが係の仕事に生かされる喜びを感じたりできたか。(見通し2)

ア 実践の概要

友達のお願いやアドバイスを取り入れた新しい仕事はどのようなものがよいのか、自分の考えをまとめたワークシートを持ち寄って係の話合いに臨んだ。その際、友達からのお願いやアドバイスは多数意見も少数意見もすべて考慮して係の仕事

を決めることを助言した。係ごとに話合いの結果をまとめられたら、学級全体に発表をした。

新しい仕事は、係ごとに振り返りを行いながら実践した。振り返りは、一日の終わりに係ごとに集まり、掲示用紙「あたらしい仕事紹介」の振り返りの箇所に記入するようにした。また、帰りの会において係からの連絡も利用して協力を呼びかけたり、協力に対するお礼の気持ちを伝えたりしながら仕事を進めた。

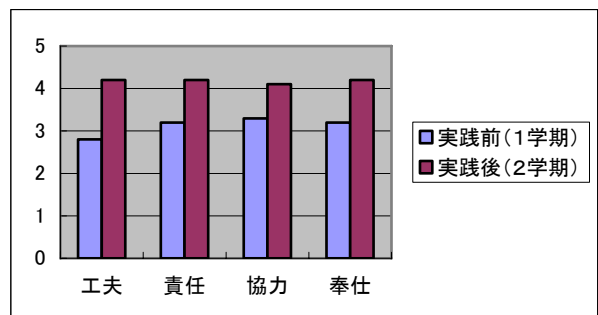
イ 結果と考察

帰りの会では常に4~5つの係が連絡を行うようになった。連絡の内容は一方的な押し付け的な言い方ではなく、「アンケート用紙を入れる箱をロッカーの上に用意しましたので、そこにに入れてください(新聞係)」「今日は、〇〇と△△の紙を配りました。手元にない人は言ってください(集配係)。」など、友達がうまく行動できるための留意点に近いものが多くなった。また「みんなの前で言うのは少し恥ずかしいけど、みんなが忘れ物をしなくなったのがとてもうれしい。」などといった前向きな気持ちが表れた発言も聞かれるようになった。

しかし、中には学級の役に立っている実感がもてず、仕事に意欲的になれない児童も見受けられた。そのような児童には帰りの会で、教師の側から、仕事の価値を意味付けし、その価値に気付けるようにして励まし、意欲の継続化を図った。

係活動に対する意識は実践前(1学期)と実践後(2学期)に調査した。5点満点の自己評価で行った。項目は①友達のためを考え工夫して仕事をした②責任をもって最後まで仕事をした③係の仲間と協力して仕事をした④友達のために役立つ仕事をした、の4項目である。結果は資料4のとおりである。

資料4 係活動に対する児童の意識の変化(最高5点・学級の平均値)



どの項目についても実践前に比べ約1ポイントずつ上昇が見られたことから、児童は新しい仕事を単に責任感をもって行えただけでなく、友達のためになる仕事を意識しながら、工夫して取り組んでいたと考える。

また、自由記述の感想で資料5下線のような肯定的な記述が見られたことから、自分たちの仕事振りについて手応えを感じるとともに、友達の仕事ぶりにも関心をもちながら生活できたと考えられる。

資料5 新しい仕事に対する児童の感想

- ◎係の人が一つ一つの意見について考え、行動してくれているから今のクラスができているのだから、意見だけでなく、考え、行動してくれるクラスのみんがいることが何より、大切でうれしいことだと思う。(男子児童)
- ◎今はアドバイスやお願いをなっとくしていい係の仕事がたくさんできているのでよかったです。(男子児童)

児童が書いたお願いやアドバイスは、その多くが新しい仕事に生かされた。自由記述の感想では資料6下線のように、自分の意見が生かされ学級がよくなっていく喜びや、自己肯定感の高まりを示す記述がほとんどの児童から見られた。

資料6 「お願い&アドバイス」が生かされた際の心情①

- ◎はいぜん台係さんが、だんだん少しずつ配膳台を出すのが早くなってきて、ぼくは「ぼくが書いたことを気にしてくれたのか、書いてよかった」と思いました。(男子児童)
- ◎ぼくの見のことを使ってくれてうれしかった。黒板のじしゃくをどけてくれて。ぼくの見はやくにたたないと思ったけれどやくにたってよかった。黒板がきれいになったから見やすくなった。きもちいい。(男子児童)

A男も落とし物係として、落とし物を紹介する仕事を丁寧な言葉遣いで行うようになった。また、落とし物を持って後ろの席の友達にまで見せに行くなど、見る側の友達のことを考えた仕事の仕方を工夫する様子が見られた。

A男が書いた「生き物をもっとふやしたほうが

いいと思います。」というアドバイスは、生き物係が新しい仕事を生み出すきっかけとなった。資料7下線にも見られるように「ぼくの見がみんなにつかわれるからうれしいです。」と、自分の意見が生かされる喜びの気持ちをもてた。また、「もっとくふうしてかけば、みんなの係がものすごくいい係になると思う。」など、学級全体の役に立ちたいという前向きな気持ちをもつことができた。

資料7 自分の書いた「お願い&アドバイス」が生かされた際の心情②(A男)

ぼくの見がみんなにつかわれるからうれしいです。でも、ぼくの見がみんなにつかわれるように、くふうしてかけてあげば、みんなの係がものすごくいい係になると思う。

以上のことから、友達のお願いやアドバイスを取り入れながら新しい仕事を考え、実践することにより、児童は友達のためになることを意識して仕事をしたり、自分の意見が係の仕事に生かされる喜びを感じたりして生活できるようになったと考える。

(3) 児童は友達の気持ちや願いを考えて活動するよさや、友達の活動をしっかりと見つめ、温かく認め合うことの大切さに気づけたか。(見通し3)

ア 実践の概要

それぞれの係が行った新しい仕事についてよかった点や感謝の気持ちを付箋に書いて言葉で贈った。付箋は際限なく書くことはせず、一日に一枚程度でいねいに書くようにした。書いた付箋は掲示用紙の「ありがとう！」のスペースに貼った。

また、「ありがとう！」の言葉を贈る活動と同時に、新たなお願いやアドバイスが生まれた場合はこの場面で書く活動も行い、2度目のサイクルで新しい仕事を考える際に生かすようにした。

イ 結果と考察

係によって、「ありがとう！」の欄に貼られる数に違いはあったものの、係の児童は新しく付箋が貼られると、嬉しそうに読んでいた。貼られた紙を一日に何度も声に出して読んでいる児童の様子からも、友達からの感謝の言葉は、係活動を進め

る上で大きな励みになっていたと考える。

自由記述の感想の中には、資料8下線のように自分の仕事が友達のためになり、喜んでもらった満足感や活動への自信を示す内容が、半数以上の児童の記述から見られた。さらに「こんなに喜ばれるとは思わなかった。」など、友達の心の内面を知り、新たな視点から友達の心のあり方に気づいた発言もあった。

資料8 「ありがとう！」の言葉を受けた際の心情①

◎私はありがとうの紙に「絵を書いた紙をうら返しにして配ってくれてありがとう」と書かれているのを読んで、こんな小さなことでもちゃんと見ていてくれるんだな〜と思ってすごくいい気持ちになりました。(女子児童)

◎今「ありがとう」の紙を見たところ「このクラスの黒板は、南小で一番です」という紙を見ました。その紙を見て「アドバイス」に書いてあったおりに気をつけたりくふうするだけで、こんなにいい気持ちになれるのだとわかり、ほかの人にもこの感じを味わってもらいたいと思いました。ありがとうの言葉のおかげで、今後もがんばろうという気持ちがわいてきました。(男子児童)

A男は「ありがとう！」の言葉について、自由記述の感想で、資料9下線のように「ありがとうのところにはあってすごうれしかったです。」や「あともっとこういう紙がはってくる(もらえる)ように、もっとくふうしたいです。」などと記した。このような記述から、A男は自分の活動が認められた喜びや次の活動への意欲をもてたと考える。

資料9 「ありがとう！」の言葉を受けた際の心情② (A男)

おとし物がなにかすくわかるように
なりました。と ありがとうのところにはあ
ってすごうれしかったです。
あともっとこういう紙がはってくるよ
うに、もっとくふうしたいです。

以上のことから、児童は「ありがとう！」の言葉を贈り合う活動を通して、友達の気持ちを考えて行動するよさや、友達の活動を認め合うことの

大切さに気付くことができたと考える。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

「みんなでつくる係活動」を行うことで、児童は今まで行ってきた係活動の仕方を見直し、常に友達の気持ちや学級のためになることを意識した取組を行うことができた。

「お願い&アドバイス」の活動では、様々な考え方を受け入れ、それらに対応する大切さを学んだ。自分のお願いやアドバイスが活かされ、係活動、さらには学級全体がよりよくなっていく喜びに気付く、自分中心から学級全体へと視野を広げて考えることよさに気付くことができた。

「ありがとう！」の言葉を贈り合う活動では、友達の気持ちや願いを考えてともだちのためになる仕事をするよさに気付くとともに、友達の温かいもの見方に接することができた。

これらのことから、「みんなでつくる係活動」は、本学級の児童にとって、友達の気持ちや願いを考えて行動できるようになるための手だてとして、有効だったと考える。

2 今後の課題

活動している姿が、周りの児童に分かりやすい係と目立たない係がある。目立たない係については教師が学級全体の場で取り上げ、良さや頑張りを認め、賞賛し、児童の価値観を広げる支援をしてきた。

児童がより主体性を持って友達との信頼関係を築き、行動していけるように、今後も継続性をもって指導に当たっていききたい。

〈参考文献〉

- ・文部省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社(1999)
- ・廣橋 勝則 著 『特別活動研究5月号「他者との折り合いのつけ方をどう教えるか」』 明治図書(2005)
- ・岸本 勝義 著 『特別活動研究8月号「学びへの動機付けを図る指導の工夫」』 明治図書(2005)

(担当指導主事 阿部 泰博)